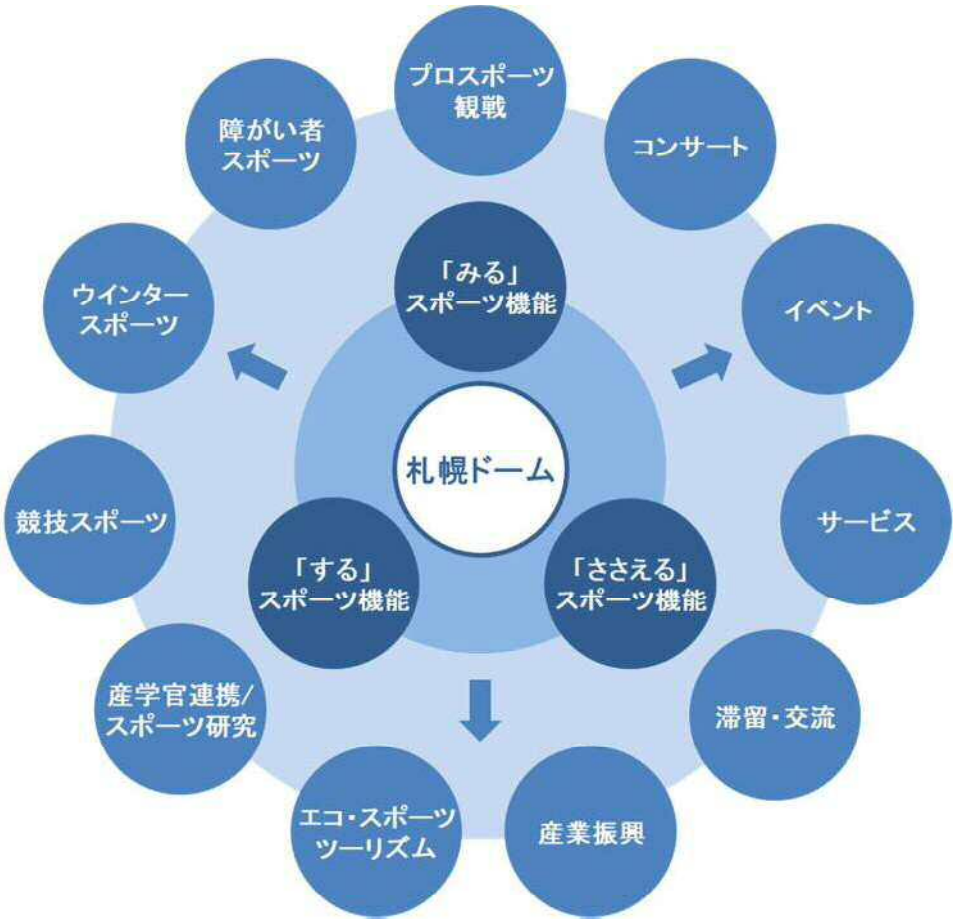
4　スポーツ交流拠点の在り方

４－１　拠点整備イメージ

札幌ドーム周辺におけるスポーツ交流拠点整備においては、札幌ドームと連携した「する」「みる」「ささえる」スポーツ機能による複合拠点を形成する。また、この拠点を形成する機能が、周辺の豊かな地域資源等を活かしたエコ・スポーツツーリズムや、近隣の施設等との産学官連携・スポーツ研究等といった拠点周辺での交流・滞留や産業振興の機会の創出につながり、経済や地域の活性化に貢献することを目指す。



スポーツ交流拠点整備のイメージ

（１） ４つの基本理念

拠点整備のイメージを踏まえ、札幌の魅力と活力の向上を先導するスポーツ交流拠点に向けた４つの基本理念を定める。

１．自分にあったスポーツの楽しみ方に出会える機会の提供

２．アスリートの発掘・強化とスポーツをささえる人材の育成

３．施設集約と拠点性向上による経済・まちの活性化

４．守り受け継がれてきた地域資源の活用

（２） 整備コンセプト

４つの基本理念を実現するための整備コンセプトを、以下のとおり定める。

１．自分にあったスポーツの楽しみ方に出会える機会の提供

- プロスポーツの観戦環境の強化や、新たな「みる」スポーツ機能や「する」スポーツ機能等の整備による、「する」「みる」「ささえる」といった様々なスポーツにふれる機会の提供
- 子どもが滞在できる機能の導入等、多様な世代がスポーツ活動を行える機会の拡大
- 障がいの有無に関わらず気軽にスポーツに参加できる機能の導入や、産学官連携によるスポーツ医学への取組等による、市民のスポーツ振興や健康づくりへの寄与

２．アスリートの発掘・強化とスポーツをささえる人材の育成

- 子ども向けの「する」スポーツ機能の導入による、子どもや若年層の競技人口拡大と、アスリートの発掘・強化の土台づくりへの寄与
- 障がい者スポーツの利用も見込んだ設計や運用による、障がい者アスリートの利用向上・競技人口拡大への寄与
- アスリートのセカンドキャリア支援等の機能導入による、スポーツを「ささえる」人材の育成

３．施設集約と拠点性向上による経済・まちの活性化

- 施設の集約化と機能連携による、拠点内施設の稼働率・収益性の確保・向上
- スポーツイベントのみならず多様なイベント興行が行える環境整備による、稼働率・収益の向上
- 多くの利用者が１日中楽しめる滞留機能や利便施設等を配置することによる、拠点周辺も含めた経済・まちの活性化
- 利便性が高い拠点となるよう、アクセス性の向上

４．守り受け継がれてきた地域資源の活用

- 豊かな自然を介した学びや交流機能の導入による、地域資源の活用
- スノーアクティビティやウインタースポーツプログラムなど、地域資源である雪に触れる機会の場の創出による、ウインタースポーツへの関心向上と裾野拡大
- 景観や環境に配慮し、周辺環境を活用した施設計画

＜スポーツを通じた地域との交流・学習事例＞

富士通スタジアム川崎（川崎市）では、市内最大の行事である「かわさき市民祭り」の期間中にアンプティサッカー選手権大会（2019 年の第 9 回大会）を同時開催することにより、アンプティサッカーの認知度向上と賑わい・交流の増加を実現（写真は富士通スタジアム川崎 HP より。）

川崎フロンターレによる「坂道もらくらくウォーキング教室」の様子。体をほぐす事から始め、息切れせずに、坂道も無理なく楽な呼吸でウォーキングできる事を目指す健康教室である。（写真は川崎フロンターレ HP より。）

スノーストライダーの様子（写真はストライダー社 HP より。札幌市内 5 つのスキー場とタイアップした「SAPPORIDER」という企画もあり）

４－２　拠点整備の基本方針

スポーツ交流拠点における「する」「みる」「ささえる」機能を持った以下の施設について、４つの基本理念を実現するための基本方針を定める。

整備にあたっては、「札幌市スポーツ施設配置活用実施方針」に基づき、老朽化したスポーツ施設の集約等、効率的・効果的な配置・運用や、障がい者スポーツ機能の導入等による共生社会の実現に向けたスポーツ環境、民間活力の導入等を検討する。

１）札幌ドーム

多目的市民利用施設としての能力、可能性を最大限発揮させるため、アマチュアスポーツ等の開催支援や、多様なイベントの開催等に対応するための機能拡充による活用推進を検討する。

２）アリーナ

主にプロスポーツチームの試合や、音楽・イベント興行等に活用するための「みる」スポーツ施設として、アリーナの整備を検討する。

検討にあたっては、収容人数や仕様を札幌ドームと区別化を図るとともに、ドームと緊密な連携・協業による多種多様な興行等の需要を拠点に取り込み、スポーツや集客交流産業の振興を図るため、拠点におけるにぎわいの創出を目指す。

３）屋内・屋外スポーツ施設

年齢や障がいの有無に関わらず利用可能な屋内・屋外スポーツ施設の整備を検討する。

検討にあたっては、周辺のスポーツ施設等の集約化や、機能の複合化による重複する機能の効率化、アリーナとの併設等による効果的・効率的な整備・運用の観点を重視して進めることとする。

多様性のあるスポーツ環境を実現し、市民の誰もがスポーツに参画できる場の創出と健康づくりに寄与することを目指す。

４）にぎわい施設

札幌ドームやアリーナとの相乗効果を期待し、交流拠点としてのにぎわい創出に寄与する施設の整備を検討する。

検討にあたっては、多くの利用者がスポーツ観戦の前後の時間も含めて１日中楽しめる滞留機能や利便施設等、スポーツを「みる」「する」「ささえる」様々な機能を集積し、相乗的に集客交流効果を高めることや、スポーツを中心としたまちづくりの中核となる拠点形成を目指す。

５）その他の機能・施設

スポーツを「する」「みる」「ささえる」様々な機能を補完する施設や、拠点性の向上・補完する機能について検討を行う。

検討にあたっては、エコ・スポーツツーリズムやスノーアクティビティなど、周辺に広がる豊かな自然環境や景観にスポーツを通じてふれあうことができる機能や、スポーツによる健康づくりを補完する機能、幅広い世代がスポーツに親しむきっかけをつくる機能など、多様な機能の集積によるスポーツが持つ様々な力を発揮できる環境整備を目指す。また、施設の利便性向上の観点から、施設配置や利用者数等に応じた駐車場やバス乗り場の整備等、施設利用者のアクセス性向上も検討する。

そのほか、スポーツ・医療の産学官連携や、トップアスリートの活動拠点の誘致等により、アスリートを「ささえる」人材の育成や、アスリートの国際競技力を向上させる機能の設置についても検討する。

＜他都市の施設・機能の事例＞

SAGA アリーナ

（2023 年春頃オープン予定、約 8,400 席、V リーグ久光スプリングス、B リーグ佐賀バルーナーズのホームアリーナ。外観パースは佐賀県 HP より。）

ステイプルズ・センター

（米国ロサンゼルスに立地。収容約 2 万人、NBA、WNBA、NHL 各チームのホームアリーナであり、アイスホッケー場からアリーナへの迅速な転換により、同日に NBA と NHL の試合開催が可能なことで知られる。外観は Staples Center official website より。NBA 試合実施時の内観は㈱日本経済研究所撮影）

墨田区総合体育館

（メインアリーナの収容人数は、300～1,000 人。写真は墨田区 HP より。）

熊谷ラグビー場

（B グラウンド、座席 6,700 人。写真は熊谷スポーツ文化公園 HP より。）

MURASAKI PARK TOKYO

（スケートボード、インラインスケート、BMX 用の屋内外スケートパーク。㈱日本経済研究所撮影）

４－３　ゾーニング

拠点整備の基本方針を踏まえ、スポーツ交流拠点を整備する上で想定されるエリアと、各エリアのイメージを検討する。なお、以下のエリアが連携することで、相乗効果を生み出し、このスポーツ交流拠点の価値を高めることで、本構想策定の目的に寄与することが期待できる。

１）集客エリア

アリーナを配置した「みる」スポーツ、音楽・イベント興行等による集客エリア。市内外から多くの利用者、観客等が集まるエリアであり、本拠点を一大交流拠点とするための基幹エリアとなる。

週末・休日は、音楽興行や各種スポーツ興行、平日は商談等のビジネス利用や各種イベントにより、常時、多くの人々で賑わうエリアと想定する。

２）交流エリア

屋内・屋外スポーツ施設による「する」スポーツを中心とした交流エリア。年齢や障がいの有無に関わらず、様々なスポーツを行う人が集うエリアとして整備し、週末・平日ともに多くの利用者で賑わうエリアとなる。

日常的な利用が可能なため、平日のにぎわいの創出と、他のエリアへの相互交流を生み出すベースとなるエリアになることを想定。大会やイベント利用も可能なため、週末や休日は市内外からの集客も期待できるエリアと想定する。

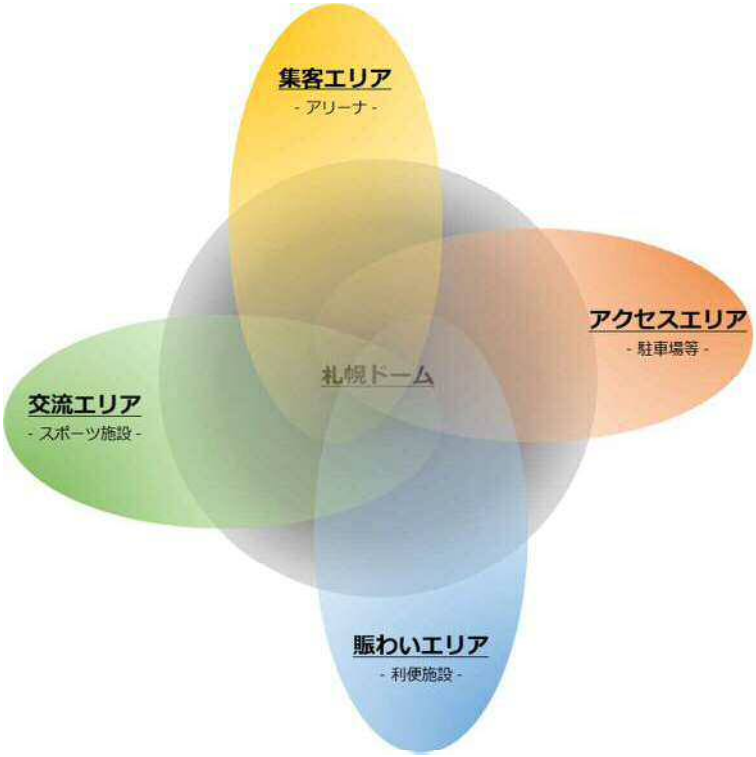
３）にぎわいエリア

利用者向けの利便施設として飲食・物販・サービス等の機能を整備し、拠点の導入部分に配置することで、「拠点全体に活力をもたらすゲートウェイ」としてにぎわいを創出する。また、子どもが滞在できるような機能や、若者を中心に人気の高いスポーツができる機能等の導入により、スポーツに興味を持つきっかけを創出するエリアともなる。なお、にぎわいエリアは、他のエリアと相乗的に集客交流効果を高める機能が集積し、拠点全体のサービスを補完するとともに、持続可能な拠点となる役割を担う。

４）アクセスエリア

札幌ドームやアリーナ等へのアクセス性を高めるエリア。多数の利用者やイベント開催による集客が、アクセスエリアを通じて移動することが想定される。エリア内には、必要に応じて新たな駐車場やバス乗り場等を設けることを検討する。なお、平面駐車場は利用状況に応じ、屋外アクティビティを行える場として提供するなど、市民がスポーツ観戦や実施後に気軽に楽しめるエリアとして共用できるような機能を想定する。

アクセスエリアは、拠点内で共用することが想定されるため、効率的な配置・運用が期待できる。



ゾーニングイメージ

４－４　2030 年冬季オリンピック・パラリンピック招致に向けた活用案

本拠点は、2030 年冬季オリンピック・パラリンピック大会が札幌で開催された場合に、開閉会式会場やアイスホッケー会場、メダルプラザ[15]等のにぎわい会場として活用することを想定している。大会期間中は、大会の象徴となる場となるとともに、大会終了後は、新たなレガシーとして大会の記憶をつなぐ象徴空間となる。

１）札幌ドームの活用案

札幌ドームは開閉会式会場として活用し、数万人の集客が想定される。オリパラの象徴となる施設のひとつであり、国内外から多くの観客が集まることが考えられる。

２）集客エリアの活用案

アリーナはアイスホッケー競技のメイン会場として活用し、大会期間中は常時国内外から多くの観客が集まることが考えられる。

３）交流エリアの活用案

屋内スポーツ施設は、アイスホッケー競技の練習会場や大会運営施設として活用する。

また、屋外スポーツエリアは、積雪により多くが平場となる特性を最大限に活かし、大会期間中は、メダルプラザやホスピタリティ施設等[16]を整備するほか、天然雪を活用したウインタースポーツ体験ができる場等を設けることで、オリンピックパークとして一体的に活用する。大会期間中は、市民や観客等が常時立ち寄り、にぎわいが創出されると考えられる。

４）にぎわいエリアの活用案

札幌ドーム（開閉会式会場）やアリーナ（アイスホッケー競技のメイン会場）へのアクセス性に配慮された場所に整備する飲食・物販等施設により、観客等へのホスピタリティを提供する。

５）アクセスエリアの活用案

平面駐車場には、メディア施設、バス乗降場所、セレモニー関連施設を整備し、当拠点における競技やセレモニー等の開催に必要なサービスを支えるサポートエリアとする。

---

15 冬季オリンピック・パラリンピックにおいて、各競技のメダリストに対するメダルセレモニーを行うための会場であり、メダルセレモニー以外の時間帯でも、各競技会場で行われる試合の生中継や、コンサート・文化プログラムといった多様なイベントが常に行われる。

16 スポンサーのパビリオンやオリンピックスーパーストア（大規模物販施設）、レストラン等の施設

４－５　期待される効果

札幌ドーム周辺地域におけるスポーツ交流拠点を整備することにより、以下のような社会的･経済的効果が期待できると考えられる。なお、以下の効果については、必要に応じて、事業に参画する民間事業者の協力を得ながら、具体的な指標の設定と測定方法を確立し、注視していくべきであると考える。

指標の設定にあたっては、札幌市が SDGs[17]の達成に向けた優れた取組を提案する「SDGs 未来都市」として選定されており、「札幌市 SDGs 未来都市計画」（平成 30 年８月策定）において、総合的な実施計画の策定や各種の取組に際して、SDGs の視点や趣旨を反映させることとしていることから、期待される効果と SDGs の 17 のゴール（目標）を関連付けることとする。

今後はこれらの効果を実現するため、スポーツを「みる」「する」「ささえる」施設や機能の導入可能性について検討していく。なお、検討にあたっては、スポーツ施設配置活用実施方針等を踏まえ、具体的なゾーニングや必要となる機能、施設規模、事業手法等について、段階的に整理を行い、その都度市民意見等を反映させながら進めていくこととする。

[17] 2030 年（令和 12 年）に向けた国際社会全体の行動計画である「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」（2015 年９月第 70 回国連総会採択）において、持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals)として 17 のゴール（目標）と 169 のターゲット（取組・手段）が掲げられている。

１）　誰もが気軽にスポーツにふれられる機会の創出

ライフステージや体力に応じたスポーツをする機会の創出のみならず、多様性のあるスポーツ環境の整備により、若年層のスポーツ実施率向上の効果も期待できる。

２）　スポーツを通じた健康づくり

ライフステージや体力に応じて、「みる」「する」「ささえる」スポーツ機能の活用により、スポーツ活動に参加する機会が創出される。また、これらの活動により生み出される多様な人々との交流が、人生の楽しみや生きがいなどに繋がることで、介護予防や生活習慣病の予防・改善等、心身ともに健康な状態を長く維持することが期待できる。

３）　障がい者スポーツ活動の場の拡充

障がいのある方のスポーツ利用やスポーツのプログラム等、スポーツ施設のアクセシビリティ向上による障がい者スポーツ活動の場の充実は、障がいのある方のスポーツ実施率を高め、障がい者スポーツが地域に定着することが期待できる。

４）　アスリートや指導者の輩出

プロスポーツに身近にふれあう機会の創出や、障がいの有無や年代に関わらずスポーツを実践する機会が増えることで競技人口の増加が期待できる。また、専門的なスポーツ指導を受けられる機会の創出により、アスリートの発掘・強化も期待できると共に、指導者の雇用創出等、アスリートの発掘からセカンドキャリアの活用までの好循環が期待できる。

５）　施設の総量適正化と機能向上

老朽化したスポーツ施設等の集約による施設総量適正化と、スポーツ交流拠点として効果的・効率的な施設整備による機能向上が期待できる。

６）　国際大会やイベント等を通じた地元への愛着の醸成と魅力発信

トップスポーツチームのホームゲーム開催や、コンサート等のイベント開催により、スポーツ交流拠点に訪れる機会が増加することは、地元への愛着の醸成へとつながる。また、国際大会やスポーツを通じた国際交流等は来札外国人選手・観光客等が札幌市の魅力に触れる機会を創出するとともに共生社会の実現を推進する。さらに、国内外から来る観客やメディア等による札幌の魅力発信は、市民のアイデンティティの形成や経済・まちの活性化に大きく貢献することが期待できる。

７）　スポーツ施設のプロフィットセンター化

民間活力の活用により、公的資金の抑制だけでなく施設の充実やサービスの向上等、プロフィットセンターへの転換を図ることが期待できる。また、プロフィットセンターへの転換により、スポーツ施設の維持管理費や更新費用を将来世代に積み残すことを止め、持続可能な施設へと変革することも期待できる。

８）　札幌ドームの活性化

スポーツ交流拠点として一体的に整備することにより、エリア全体のにぎわいや、他のスポーツ施設との相乗効果による札幌ドームの施設利用の機会創出と、稼働率向上が期待できる。また、札幌ドームとアリーナにおいて、トップスポーツチームの試合に併せたビジネス利用による、VIP ルーム等の新たな活用も期待できる。

９）　地域資源の発見や新たな活用創出

札幌市の資源である札幌ドームや、丘陵地形に牧歌的風景や樹林地空間が広がっている周辺の豊かな自然について、スポーツを通じた新たな発見や活用が期待できる。また、地域資源を活用したスポーツツーリズムの展開により、スポーツを目的とした国内外の観光客の誘致や、ウインタースポーツ環境のＰＲにもつながる。

１０）多機能・集約化による経済・まちの活性化

多様なイベントの開催や、札幌ドームと相乗効果が期待できる多様な施設の立地により、拠点全体を活かした集客を創出するとともに、スポーツ×異業種といったイベントの開催や、持続性のあるスポーツイベントや大会・合宿の誘致等による交流人口の拡大が期待できる。また、スポーツ施設と相乗的に集客交流効果を高める機能が集積することにより、近隣エリアへの波及効果や、周囲のまちづくりの動きとの連携により、経済やまちの活性化が期待できる。